

---

# 潜在能力は有効に使いましょう（改）

達ノ音吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

潜在能力は有効に使いましょう（改）

### 【Nコード】

N7944Z

### 【作者名】

達ノ音吉

### 【あらすじ】

笹木涼（主人公）は平穏な日常に過ごしていた。幼馴染のエル（巨乳）や悪友の燐（負け犬）とともに、平凡なりとも面白おかしく日常を楽しんでいた。ある時、涼たちのクラスに転校生がやってくる。銀髪の少女 リア（貧乳）と名乗った彼女に対してクラスメイトたちの反応は……土下座だった。神、魔王、死神、ドラゴン！！なんでもありの潜在能力を持つ少年が織りなす学園ファンタジックコメディです。

旧作「潜在能力は有効に使いましょう」の改稿版です。しばらく

くしたら、こちらに全部移すつもりなのでその旨よろしくお願い  
します。

## 1 おっばい談笑

「もっつ、いい加減にしてください!」

「……黙るのは、あなた」

みなもとそう  
源莊七号室。

今にも抜けそうな床と、所々かびた畳。

老朽化した六畳一間の造りが何とも言えない侘しさを醸し出している。見た感じを一言で言うならば、「廃れている」が妥当じゃないだろうか。

そんなこの部屋に響き渡る乙女たちの怒声

「あなたが何を言おうと、涼くんは渡しません!」

金色に輝く髪をした少女 エルは大きく盛り上がる二つの隆起の前で、手をぐっと握り締めた。まっすぐに据えられた瞳は、「絶対不譲渡」の意志を秘めている。

ちなみに「隆起」とは おっばいのことだ。

彼女の豊満なそれは、見る者を魅了し、虜にする。

「涼は私のもの。これは決定事項」

小さな声で呟くのは、幻想的なまでの銀の髪を持つ少女 リア。

彼女は一寸たりとも表情を変えることなく、淡々と答えた。

おっばいは、小さい。

エルと違って身体の起伏が乏しく、非常に小さい。

大事なことなので二回言いました。

「なっ、そ、そんなのずるいですっ、断固抗議します!」

「ずるくない……かしこいだけ」  
「い、一緒じゃないですかっ！」

納得がいかないと、頬を膨らませ不満そうに言うエルと、気にするそぶりもなく、難なくとあしらうリア。

交錯する視線と視線のぶつかり合い。間に火花が散っているかのよう両者は互いににらみ合い、一步も引かない意志を見せ合っていた。

そんな様子を遠目で眺める一人の少年。

何を隠そう……いや、何も隠してないけど、僕こと、笹木涼なみきじょうのことだ。僕はもうかれこれ一時間以上もこの光景を目の当たりにしている。

正直、暇だ。暇すぎて、ひつまぶしが食べたいくらいに。

「だ、だいたいどうして魔王側が涼くんを狙うんです？ 涼くんは神の力を持つ者 手を出す理由なんてどこにもないじゃないですか！」

「違う……涼は魔王の力を持っている。それは実証済み」

そう言つと、リアは艶めかしく唇をなでる。

「う、嘘です！ 涼くんが魔王だなんて。そ、それに今も神の力を感じますし！！」

「私だって魔王の力、感じる。だから涼は私のもの」

うーむ、何やら僕の話をしているようだが、何を言ってるのかさっぱりわからない。

神？ 魔王？

ファンタジーな妄想は中二で卒業し はっ！？

「ま、まさか！ 僕はうちゃんねるの神」  
「じ、じゃあ、涼くんは相反する二つの最高位の力 神と魔王の力の両方を持つているということですか……？」  
「そういうことになる」  
「……………」

僕に一瞥の反応すら見せず、二人はおのおのに驚愕を露わにしていた。

べ、べつにかまってくれなくて悔しいなんて思ってないんだからねっ！

……話の内容から察するに、僕には神とか魔王とか、何かしらの力があるらしい。しかも、それはすごいことのようにだ。それは二人の驚きようを見れば一目瞭然だった。

「あっ」

脳裏をよぎったことに、僕は思わず声を上げてしまった。

「どうしたんですか？」「……………何？」

先ほどまで言い争っていた二人は、揃って僕のほうを訝しげに見てくる。

フツ、それも些細な事さ。

僕は気づいてしまったんだから そう、とても重要なことに。それはこれからの将来を左右するかというほどのことだ。

「ひとつ、聞いてもいいかな？」

仰々しく人差し指を立て、僕は真剣に言った。

「それは就職で有利に  
「なりません」「ならない」

即答だった。

どうやら神や魔王は資格ではないらしい。

ふう……世知辛い世の中だよ。

二日前のこと

僕こと、笹木涼はいつもどおりに平凡な日常を過ごしていた。

いつもどおりに目覚め、いつもどおりに朝の支度をする。

それが僕の当たり前前の日常であり、平凡だった。

朝のまどろみを春の暖かな陽気と、小鳥たちの囀りが盛り上げて  
いる。

もう、桜が満開になる季節。

春になると変なのが出てくると母さんから聞かされてきたけど、  
残念ながら今年はまだお目にかかってない。というか今まで一度も  
見たことがない。

まあ、それを言ってる母さんが一番変人なだけだね。

僕が実家にいるときは「出たな、魔王！ その命、頂戴する！」  
「ははは、神に使わされし勇者よ！ 返り討ちにしてくれるわ！」  
と、父さんとイチヤイチャしてるのを毎日見てたからね。真剣で切  
りかかったりとか、甲冑着てたりとかでかなりリアルだったけど。  
まあ、傍から見てる僕に言わせれば、「いい歳して何してんの、こ  
の人たち？」って感じだよね。

つまり何が言いたいかというと、僕は変人がどれくらい変な人の  
ことを指すのかわからないということ。

幼いころから両親たちの変人ぶりを見ている僕はその手の感覚が麻痺しているらしい。

つい先日も悪友から「お前の幼馴染なんだよ!？」 いろいろおかしいぞ!」と何やら批判されたところなのだ。

ピーン、ポーン……

慎ましいチャイムの音が響く。

おっ、噂をすれば何とやらで、

「涼くん、学校行きますよー」

なじみのある透き通るような声。

玄関のほうから、悪友に言わせるところのいろいろおかしい幼馴染の声が聞こえてきた。

「あいあい、わかりましたよー」

曖昧な返事を返して、鞆をとり、朝食のパンをかじりながら玄関に向かう。

ドタバタと足音を立て、駆けていくと そこには、金髪の美少女がいた。

眩しい金色の輝きが目飛び込んでくる。流麗な長い髪と彼女の白無垢のような肌と相まってか、何度も見ている僕でさえ目を奪われてしまう。

見惚れていると「早くしないと遅刻しますよ!」と急かされ、ようやく我に返る。

「ふあふあっふえふ」

わかってる、と言おうとしたが、パンを加えている状態なのでちゃんと言えていない。

気にせず、僕は腰を落として靴の紐を結び始めた。

「もっつ、本当にわかってるんですか！」

どうやら解読してくれたらしい。

さすが幼馴染、と思った。

僕がこっちに来ると言った時も、「わ、私も行きます！」と一緒に進学を決めたくらいだ。

今ではこの源荘の隣にあるデザイナーズマンションに居を構えて、毎朝僕を迎えにきてくれている。

本当に気のきく幼馴染だ。いつそのこと、お母さんって呼びたい。

「ごくん。出来た幼馴染を持って僕はしあわ」

目の前の光景に息をのんだ。

パンを飲み込んで、靴ひもを結び終え顔を上げると　そこには二つの山があった。

おっばいだ。

制服を征服せんがごとく、双乳が大きく自己主張している。

今、下から見ている僕からすれば、上が見えないほどの大きさだった。

僕は率直に

「ごめん、エル。下乳で上が見えない」

「!?!」

感想を言ってみた。

バツと後ろに飛び退くように僕から離れるエル。その顔は羞恥の

ためか、熟れたトマトのように真っ赤になっていた。

今さらだけど、彼女、エルトリーナ・ラファードは僕の幼馴染だ。そう、僕らは小さいころからなんでも一緒だった。

「ははは、恥ずかしがることないよ。一緒にお風呂に入った仲じゃないか」

「っ！ い、今と昔じゃ全然違いますっ！！」

「うん。確かに大きくなったよね？」

「ど、どこ見て言ってるんですか！！」

どっつて、そりゃ、ねえ？

ひょうひょうとした僕の態度に、エルはすでに涙目だ。両手でその大きな胸を隠し、こちらをキツと睨みつけている。

「包み隠さず言うならば おっぱいだよ？」

「ホントに堂々としてますっ。もうっ、少しは悪びれてください！」

「うーむ、なら専門用語を使えば 乳だよ？」

「言い方の問題じゃありません！」

「流行の言葉を用いるならば パイ乙」

「それ、失礼ですよね？ 私、怒ってもいいですよね！？」

「……早くいかないと学校遅刻するよ？」

「ええっ、涼くんがそれを言いますか！？」

エルの叫びを切り目に、こうして僕の朝のおっぱい談笑は幕を閉じるのだった。

## 2 M学級崩壊

私立 かみのま 神魔高校。

源荘より徒歩十分の場所にあるその学校こそ、僕やエルの通う高校だ。伝統こそあるものの 偏差値、中くらい。部活動成績、そこそこ。といったどこにでもありそうな校風だ。

特徴は、特徴がないのが特徴。そのせいか、昨今の少子化のせいかわからないが、僕が受験する時も定員割れだったようだ。都市部に近いにもかかわらずである。

目立つものといえば、校門近くにある石碑。そこに刻まれている「変人こそ、天才だ」の言葉は、初代校長の口癖だったそうだ。

たぶん、校長が変人だったんだと思う。

ともあれ、僕がこの学校に通おうと決めたまっかけがそれだったのだ。

なぜ実家から遠いこの学校に進学しようと思ったのかと聞かれれば、思い当たる節は一つしかない。

僕は思った。

こんな面白いことを石碑に刻む校長が建てた学校がつまらないはずがない、と。

僕の成績ならばもう少しレベルの高い学校に進学することもできたんだけど……

やっぱり、一度しかない青春。

謳歌するには、面白い学校に行かないとね？

ちなみにこのことをエルに伝えたら「そ、そんなことのために私は……！！」と何やら手と膝をついてうなだれていた。

うーむ、何かあったんだろうか？

教室に入ると、雰囲気違和感を覚えた。

何というか、男女問わず騒がしい。皆それぞれが目を輝かせ活気

に満ち溢れている。女三人集まれば、姦しいというが 男が加わるとやかましいな。

「ねえ、これどうしたの？」

僕は近くにいた悪友に声をかけた。

「おお、我が友、涼よ！」

「ごめん。僕、友達とは……」

「思っただけでもそこは友達で通してくれよ！ 申し訳なさそうな態度が逆につらいよ！」

悪友は悲痛そうに叫んだ。

ガラの悪そうな癖のある茶髪に、ピアス。ファッション雑誌を真似しましたと言わんばかりのチャライ容姿に比べて、心がピュアなこの男。

名を、紅蓮<sup>くれんりん</sup>燐。

名前負けとは、まさにこの男のことだろう。

そう、この男を一言であらわすなら、負け犬。

「……なあ、涼。ものすごく失礼なこと考えてないか？」

「うん」

「ちよつとは悪びれてくれよ！」

「だって負け犬は事実だし。否定できないよ」

「そ、そんなことねえよ！ お、お前らも何うなづいてんだ！」

教室を見渡すと、ほぼクラスメイトの全員がうんうんとうなづいていた。

やっぱりみんなもそう思うよね。だって、燐だもん。

「で？ 次は誰にフられたの」  
「ま、まだフられてねえよ！」  
「まだって……」

燐は学内にいる女子全員に告白して、全員に断られたという記録を持つ男だ。

ゆえにその実績をたたえ、負け犬と呼ばれている。偉大なる敬称だ。

今では他学区の女子にまで手を出そうとしているらしい。まあ、結果は見えているけど。

僕は心底不憫そうな目で燐を見つめた。

「そ、そんな目で見るなよっ。心が折れそうになるだろ！？」

「まあ、燐のことなんてどうでもいいけどね」

「ど、どうでもいいとか言うな。こっちは死活問題なんだよ！！」

「朝からテンション高いね。高血圧には気をつけたほうがいいよ？」

「誰のせいだよ！」

「まあまあ、落ち着きなよ。ストレスをためるとハゲるよ？」

「お、お前が言うなああああ！」

ふう。せつかく朝からすでに息絶え絶えの燐に気を使ってやったのだが。

それにしても本当に不憫なやつだ……

「はあ、相変わらずですね。それでどうしてみんな騒いでいるんですか？」

このままいつでも踏ん切りがつかないと思ったのか、僕の隣に控えていたエルが自ら問うた。

それが救いの女神に見えたのか、燐は

「おお、助かった！ さすが、ラファエ」

何かを言おうとした。

だが、刹那のうちに燐は窓の外にいた。

遅れて聞こえるガラスの破碎音。

窓ガラスには人の形をした跡があり、エルはまるで何かを押ししたような体勢のまま固まっていた。

僕には何が何だかわけがわからなかった。

混乱する頭の中　　だけど、一つだけ理解していることがある。

「ここ、三階だよね？」

呟いた時、窓の外にあった燐の姿は消えていた。

「ぎゃああああああああああ」

「……………」

姿の消えた燐の声が断末魔に聞こえたのは、気のせいだと思いたい。空耳だよ、空耳。

あ、そういえば騒ぎの理由聞いてないな。

「いったい何だったんだろっね？　　エル」

「え、あ、その　　そ、そうっ、幻覚ですよ、幻覚！」

「？　　僕はいったい何の「騒ぎ」だったんだろっね、って聞いたんだけど…………？」

「あっ、そ、そうですね！　　な、何の騒ぎだったんでしょうね！？」  
「??？」

どこか慌てるような様子でエルは相槌を打った。  
うーん、何か変なこと言ったかなあ……

結局、燐が帰ってきたのは昼休みだった。

全身にぐるぐると包帯を巻きつけ、よろよるとこちらに近づいてくる。ぱっと見で言つと、エジプト産のミイラにしか見えない。

「ええと、大丈夫？ ものすごく瀕死の重傷っぽいんだけど」

「あ、ああ。た、大したことねえよ」

声をどもらせながらも、燐は問いに答えてくれる。

だけど、その視線は僕ではなく エルのほうをチラチラとうかがっている。よく見ると、燐の身体はプルプルと小刻みに震え、その目はまるで猛獣に怯える小動物のように恐怖に染まっている。

そんな縮こまっている燐に、エルはにこりと微笑み、

「次は、ありませんよ？」

一言。

その言葉の意味を僕は理解できなかったが、対照的に燐は顔を青くさせ何度も、何度もうなづいていた。

次は、って何のことだろう？

「それで？ 結局、朝はどうして騒いでたの？」

なし崩しに聞くことができなかった朝の「騒ぎの理由」を、僕は問うた。

「ああ、転校生が来るんだよ……」

「えっ、転校生？」

「ああ、そうだ　　というか、今の今まで誰にも聞かなかつたのか、もう昼休みだぞ？」

「うん。死んだ燐がうかばれないと思って……」

「し、死んでねえよ！　生きてるよー！」

「ちっ、しぶとい」

「お前、ホント鬼だな！」

「　　で、転校生の話は？」

「……………」

疲れた顔をして燐は観念したようにがっくりと肩を落とした。  
まったく、世話の焼けるやつだよ。

「　　って、まだ来てないのか？　今日、転校してくるって話だったんだけど」

「そういえば来てないね？」

「ええ、来てませんね」

僕のふりにエルは首を縦にうなづく。

同時に大きなおっぱいが揺れたのは、内緒だ。

「おかしいな……魔族の事前通告じゃ、今日のはずなんだが」  
「マゾク？」

突然出てきたワードに僕は思わず首をかしげた。

マゾク　　って、何？

そんな僕の反応に、燐は右往左往と慌てている。

「な、何でもねえよ！　某学者の大予言ぐらいに何でもねえよ！？」  
「そ、そうですね。ハヤシライスの「ハヤシ」の意味ぐらい何でもないです！」

……なぜか、エルまで一緒になって慌てていた。  
二人の息の合った慌て方から察するに……僕にだけ隠すつもりだ  
な？

そうとわかれば意地でもやってやる！  
うーむ、マゾク、まぞく、マゾ……………はっ！？

「大丈夫だよ、二人とも」

菩薩のごとく澄んだ優しい目で僕は二人を見た。  
わかってしまった……………そう、わかってしまったから。

「世の中、確かにそういうことに偏見を持つ人は多い。けど、中にはありだと言う人はいっぱいいるから……………」

二人は「あれ」な人たちだったんだ……………  
そんなことも知らず、僕は今まで……………

心に込み上げてくる自らの悔しさを戒めるように、僕は言った。

「……………鞭で打とうか？」

『Mじゃねえよ！』

恥ずかしいのか二人は声をそろえて否定した。

わかってるよ、僕は偏見なんか持たないから。君たちは M族  
だよ？

「……………」

『……………』

昼休み、生温かく見つめる僕の視線が途切れることはなかった。

### 3 銀色の痴女

その日、噂の転校生が姿を見せることはなかった。

待っていても「来ない」と伝わった事実には、良くも悪くも盛り上がりを見せていたクラスメイトたちは皆そろって肩を落とし、残念そうにため息をついていたりする。それだけ転校生が来るのを楽しみにしていたのだ。その気持ちは痛いほどわかる……お預けにされたものほど欲しくなるというものだ。気分が沈むのも、憤るのも仕方のないことだと思う。

でもまあ、皆も落ち着きたまえよ。

僕が考えるに、登校する学校を間違えたのだ。うん、間違いないね。

そう、転校生さんはおつちよちよいなのだ。

仕方ないよ、うんうんあるある。

ちなみにそれをエルや隣に話してみると「そんなこと実際にやるのは、涼くんだけです！」「ありえねえよ！ どんな推理だよ！」と驚愕していた。

失礼な。僕は一回だけだよ？

放課後の下校時。

青春の汗を流すという名目の部活動や、より良い学校生活を提供するという名目の委員会に縁のない僕は、授業が終わるといつものようにエルと一緒に帰路についていた。朝の登校の時と同様 僕は源荘に帰り、エルは隣のマンションへと帰るため、それぞれの道は同じなのだ。

でも、なんとというか 幼馴染と一緒に下校するのは、妙に役得感があるよね？

そんな他愛もないことを想いながら、僕はエルに話しかけた。

「ねえ、M」

「まだ引つ張るんですかつ、それ!？」

僕の呼びかけにエルは大げさなまでの反応する。その顔は驚きでいっぱいだ。

ちゃんと返事を返してくれないとは……やれやれ、反抗期かね。

「ねえ、エル。聞いてもいいかな」

「ふ、普通に流されましたっ!」

エルの顔は驚きが二倍速だ。すごい。

僕は気にせず続ける。

「今日は来なかつたけど 転校生さん、明日は来るのかなあ?」

「……気になるんですか?」

何気なく僕が問うと、なぜか急にエルはムスツとした顔になった。口をとがらせるその様子は、何だか拗ねているようにも見える。

? 転校生さんのことを聞いただけなんだけどなあ……

「いったいどんな人が来るんだろうね?」

「そうですね……どんな人でしょうね……まともな人がいいですよ  
ね……」

なぜか遠い目をして呟くエル。

えー、そうかなあ。僕としては面白いほづがいいと思うんだけど  
な。

「僕個人としては、宇宙人か、未来人か、超能」

「それは絶対に言わせません!!」

「男の子かな？ 女の子かな？ それとも、両方の人かな？」

「最後のは個人的に聞かなかったことにしたいです……」

声細々とげんなりとしていくエル。日ごろの苦勞がたたっているのか、かなりお疲れの様子だ。

「だけど、もう一つだけ聞いてほしい。」

僕にはまだ気になることがあるのだ。

「これはエルにとっても重要なことだけど 転校生は、Sかな？」

それとも、Mかな？」

「ぜんぜん重要じゃないですよね!? というか、それはもう忘れてください!!」

「でも、Mの人だったらエルも、燐も仲良くできそうだね？」

「いやですよっ、そんな人とは仲良くできません!」

「あ、そうか。エルたちからすれば、Sのほうがいいよね。ごめん

……」

「ちょ、何かこの謝罪は釈然としませんよ!？」

エルと別れ、僕は自らの住居である源荘みなもとに帰ってきた。

築六十年の二階建てアパートである、源荘。

このアパートの主な特徴を言えば、とにかくボロい。本当に人が住んでいるのかと思うほど廃れている。柱は軋むし、瓦は今にも外れそうである。

例えて言うなら、紅蓮燐だ。

やつのように全ての女性から見放されているとしか言いようのない



にしているところを見ると、どうやら着替え中のご様子だった。

「間違えました」

そう言っつて僕はすぐにドアを閉めた。

「ふう、危ない危ない。三秒ルールでギリギリセーフだね」

今は二コンマ五秒くらいだったな、と安堵の息をもらす。

一歩下がって部屋の番号を見ると、「六号室」と書いてある。僕の部屋じゃない。

どうやら、間違えたようだ。まあ、よくあることだよ。

僕の部屋はその隣　突き当りの二つ目、七号室。

ドアが開く。

「いやあ、ひやっとしたよ……まさか、女の子が着替えてるなんて

ここがテキサスなら、僕はハチの巣だろうね」

「待って」

「OH！　イカスゼツ、ジョージイ。ナイスジョークだ！　H A H

A H A

「　あなたは、笹木涼？」

「……………はい、そうです。ごめんなさいもうしません許してください」

開いたのは、僕の部屋ではなく、六号室のドアだった。そこから覗き見るようにひよっこりと少女が顔を出している。

……………誤魔化しきれなかった。

くそう、どうしてばれたんだ！　ちゃんと三秒測ってたのに！

「そう。あなたが笹木涼……………」

確かめるように僕の名を呼んだのは、銀色の髪をした少女だった。何を隠そう、先ほどの下着姿の少女である。

エルの金髪と対になるような、肩にかかるくらいの短い銀髪。光の透き通るようなその色は、どこか幻想的で美しい。そしてそれを際立たせるがごとく、少女はさらに美麗だった。

ただし、その顔には「感情の波」といったものがまったくと言っていいほどにない。無表情という言葉は彼女のためにあるような気がした。

「今日隣に越してきた、リア。よろしく 涼」

まとめたように淡々と呟くと、リアと名乗った少女はドアを閉め、そそくさと自室へ戻っていった。

……

……

「……………え？」

彼女がドアを閉めてから、たつぷりと僕はその場で固まっていた。予想していた事態は当然、着替えのことで怒られるのかと思っていたのだが、本日からの隣人は何事もなかったかのように場を去ってしまったのだ。

この場に取り残された僕にはもう何が何だか、わけがわからなかった。

だって下着姿を見られて何も言わないなんて、まるで……………はっ！？

「そうか、彼女は……………痴女だったのか」

僕は……………またも気づいてしまった。

彼女、リアは見られると、興奮する人だったんだ。  
今度、エルや燐に「変態仲間」として紹介してあげようと思った。

#### 4 不可思議な神魔

何だかんだの葛藤と、幾人かの不幸と苦勞を経て 今日もまた陽は昇る。

「転校生、あつ、学校間違えた事件」から日を跨ぎ、翌朝。昨日と同じく、エルとともに登校すると またしても、不自然なほどの喧騒に教室全体が包まれていた。

主だつて特に今回は、男子がうるさいほどに騒いでいる。むさ苦しいこと、この上ない。

「ねえ、これどうしたの？」

真相を問いたただすべく、僕は近くにいた悪友に話しかけた。

「おお、我が友、涼よ！」

「ごめん。僕、友達とは……」

「わかつてたけどさ？ 絶対そう言われるのわかつてたけどさ！？」

二度目にしてようやく伝わった真実に、悪友は悲痛そうに叫んだ。友達に分類されない悪友こと、紅蓮<sup>まけいぬ</sup>燐は今日も今日とて、朝からテンションが高い。

「おい、涼。今、俺のこと負け犬とか考えなかったか？」

「うん」

「正直すぎるっ。というか、ホント少しは悪びれるよ！」

いつも通りといえる燐との他愛もないやりとりの中に、僕は既視感を思った。

この会話、昨日もしたような……

「昨日、昨日……あ、そうだ。燐に紹介したい痴女がいるんだけど」  
「何で痴女紹介すんだよ！そこは普通、友達とかだろ!?」  
「友達って……僕の知り合いにMマの人は、エルぐらいしかないんだけど」  
『だから、Mマじゃねえよ!』

僕の隣でおなじみの相棒 エルとともに、燐は疑いを晴らすべく必死に叫んだ。

しかし、いくら否定しようとも 事実<sup>マ</sup>は事実。僕のハートはそう簡単に心変りはできないよ。

「はあ……それで？今回はまたどうして皆さん騒いでいるんですか？」

僕の生温かい視線に気づいたのか、はたまたこのままでは話が進まないと思ったのか、しぶしぶとエルは問う。

おお、デジャヴだ。ホントに既視感デジャヴだよ！

最後に燐が神風に吹き飛ばされたら……!!

「ああ、それは今日こそ転校生が来るからだよ。昨日は不確定情報だったけど、今日のはちゃんとした筋からのだからな」

「へえ、そうなんですか。確かに昨日は「待ちぼうけ」でしたしね」「……………」

……おかしい、まったくもっておかしい。

燐が提示した真相に、エルは納得したように相槌を打っている。

そして当然のように、その「巨」なおっぱいがプルンと揺れた。

それはいい。確かに良い いや、百歩譲ってすごくいいとしよう。

「だけど、僕はすごく納得がいかないのだ。」

「おかしいよ！ どうして燐が三階から飛んでいかないのさ!？」  
「いや、お前がおかしいよ！ 何で俺が飛ぶんだよ!？」

僕の崇高なる目的　デジャヴは、KY（空気読めない）な燐の手によって無残に砕け散ってしまった。後もう少しかったのに！  
胸の内に残る悔しさを視線に乗せるように、僕は燐を睨みつける。

「何で睨まれてんのか、まったく理解できねえ！」

「はあ……しょうがないね。ホント、燐にはガツカリだよ」

諦め半分に僕は深くため息をつく。あーあ、期待してたのに。ホント、やれやれだよ。

そんな不貞腐れる僕の様子を燐は遠い目で見つめている。

「なあ、エルさんよ。この天然、どうにかしてくれんかね……?」

「すみません、私の力ではどうすることも……」

出来の悪い我が子を見る親の目をしながら、二人は細々と呟いている。僕がそちらを向くと、二人はばつが悪そうに目をそらしていた。

エルもなのか……やれやれ、二人ともわかってないね。

このままではまた話が進まなくなるので、大人な僕は話を続けることにした。

「それでさあ、どうして今日は男子のほうが騒がしいの？ 昨日は同じくらいだったよね」

「転校生が女子だからだよ。男からしたら女子のほうが断然嬉しいからな」

「へえ、だから男子はあんなに嬉しそうに騒いでいるんだ？」  
「ああ」

当然だろ？　と言わんばかりに燐は仰々しくうなづいた。  
なるほど、なるほど。確かに女子のほうが、男子的にはポイント  
が高いよね。主に目の保養にもなるし。

「転校生は女子かあ　エルはどう思う？　やっぱり女子より、男  
子のほうがよかった？」

「……………どうも思いません」

感想を問うと、エルは急に不機嫌そうに呟き、頬を膨らませ不貞  
腐れている。拳句、最後はプイッと横を向いてしまった。

？　僕、何か気に障ること言っただかなあ？

不自然な態度に思わず首をかしげていると　教室の引き戸がガ  
ラガラと開く。

「席につけー、チャイム鳴ってるぞー」

お決まりの文句とともに担任の先生が教室に入ってきた。

時間を見てみると確かに予鈴の時刻を回っていた。どうやら話し  
込んでいたせいでチャイムに気づかなかっただらしい。

それは他のクラスメイトたちも同じようで、皆、慌てて自分の席  
に戻っている。

「えー、HRを始める前に皆に転校生を紹介する。あー、喧しい、  
静かにしろー」

迫力のない先生の注意の声も耳に入らないようで、教室全体はス  
タートラインを切ったように騒ぎ始めた。

そりゃ、そうなると思う。

昨日は昨日で待ちぼうけをくらっているし、今日はそれだけ期待も膨らむというものだろう。

特に女子はともかく、男子。

僕の見間違いかもしれないけど、心なしかその目が血走っているように見える。転校生が女子だとわかっていているせいなのか、やたらとテンションが高い。マウント富士ぐらいに高い。

ちらりとエルのほうへ目をやると、まだ、ぶすつと不機嫌そうな顔をしている。ご機嫌斜めのような感じが……本当にどうしたんだろうか？

「あー、ま、いいか。とりあえず転校生、入れー」

諫めるのがめんどくさそうになった先生の声と同時に、教室の戸が開いた。

級友たちが息をのむ中で、悠々と歩を進め、転校生は入ってきた。銀色の髪をした女の子。

風のように颯爽と登場した彼女は僕らのほうへ身体を向き直した。

「リア、よろしく」

少しの緊張の色も顔に出さず、超簡易的なほどに自己紹介を済ませた。

啞然とするクラスメイトたちと、無然とする転校生。だが、彼女のその碧眼は視線を外すことなく ひたすらに僕に向かって据えられていた。

あれ、リア？ リアって、どこかで聞いたような……

「涼、昨日ぶり」

こちらに小さく手を振り、彼女は僕の名を呼んだ。あつ！

「君は……昨日の痴女！」

「……リア」

「そうそう、確かそんな名前だった！ ほら、燐！ 彼女が君に紹介したかった痴女だよ！」

若干興奮気味に僕は、依然として口をポカンとさせて固まっている燐に声をかけた。燐の席は僕の左隣なので、非常に声をかけやすい。

何度かの呼びかけでようやくハツとした燐は

「ベリア」

「……！」

何かを言おうとした。

だが、刹那のうちに燐の姿は窓の外にあった。

遅れて聞こえてくるガラスの破砕音。そして、なぜか目の前には先ほどまで教壇にいたはずのリアがいた。

窓には人の形をした跡があり、リアは何かを突き飛ばしたような体勢だった。

突然起こった事態に、僕には何が何だかわけがわからなかった。混乱する頭の中 だけど、一つだけ理解していることがある。

「デジャヴ完成だね」

とうとうというか、待ちに待ったことを呟いた時、窓の外にあった燐の姿は消えていた。

「ぎゃあああああああああ」

教室の窓越しに響いてきた燐の絶叫は、今度こそ断末魔だろうと僕は思った。

本当によくやったよ、燐。君の死は無駄にはしない。あらためて言おう、GOOD LUCK、と。

ここからでは見えない燐の落ちたほうに向かって満足そうにうなづいて　僕は教室のほうへ身を翻した。

「……………」

目に飛び込んできた光景　それは半数近くのクラスメイトが土下座しているものだった。

彼らは手と膝をつき、必死そうに地面に頭をすりつけている。

頭の下げられているほうを見ると、転校生こと　リアの姿がある。

「えっと……………何の宗教？」

困惑する僕は誰にでもなく呟いた。「クラスメイトが土下座する」という光景はそれほどまでにありえなかったのだ。何これ、イタい。

「おすわり」

その虚言に答えたのは、リアだった。彼女は相変わらずの眉一つ動かない無表情。

おすわり　その言葉を聞いて、僕はある一つの考えに至った。

連想するのは、犬。しかしかわいいうんちゃんなどではない。

おすわり　その意味するところは、一つしかない。

「なるほど……………僕のクラスメイトたちはM<sup>マ</sup>だったのか。エルや燐だ

「けじゃないとは……M度高いな、このクラス」  
「Mじゃねえよ！」

僕の導き出した結論に、級友たちは全力で否定してきた。

「大丈夫、皆でやれば怖くないよ」

「お前のその発言が怖いわっ！」

僕の提示した立案に、全身全霊でクラスメイトたちが叫んだ。はつきり言って僕には、それがとても言い訳がましく見えた。若いつて、怖い。

津軽海峡冬景色、瀬戸内海鳴門大潮。言いたいことはたくさんあるけど、結論を言えば、僕は暇になった。

三時限目の終わりを告げるチャイムが鳴ると同時に女王様もとい、転校生リアの周りには積みあがるように人垣ができていた。彼女が転校生であることを考慮しても有り余るくらいの人たちが彼女の周りを覆っている。そこへ朝の一件で明らかになったMクラスメイトたちも混じって囲んでいるのだから、取り巻きはものすごく大きい。

ここまですぐとあれだね。取り巻きじゃなくて、エリマキ 天井裏代表のトカゲさんから進呈ものだよ。

まあ、そのせいもあってか、彼女の左隣である僕の席は見事なまですぐ埋まっているのだ。国土交通省もびっくりである。

ともかく、このままじゃお昼が食べられない。

基本、僕はお弁当派ではないので、購買でパンとか買えばいいん

だけど……いかんせん、問題はそこではないのだ。

いつも一緒に昼食をとるエルのところにいこうにも、彼女は相変わらずご機嫌斜めなままだし。こんな時しか必要にならない燐は朝のあれつきり帰ってこない。

つまるところ、誰もかまってくれないので僕は暇になったというわけだ。

この状況をかっこよくいうならば　僕は暇を持て余している。  
かっこ悪くいうならば　僕は本当に友達が少ない。

「はあ……仕方ない。ウロちゃんのところにも行くかな」

かみのま  
神魔高校現校舎に隣接するように場所を陣取る　旧校舎。

べつに「旧」っていうほど廃れているわけでも、昨今流行りのアスベストでも、耐震偽装があるわけでもない。むしろまだ新しいし、現在の校舎と比べてもさして遜色はないように見える。

これに「旧」をつけるなら、源荘には「古」をつけなければならぬと思うほどだ。

だが、旧校舎には現校舎にない特徴というものがある。

それは屋根や壁といった外装に際立っている。外壁に描かれた星みたいな形の落書きや、建物全体を覆い尽くしているおびただしい無数の御札が圧倒的なまでの存在感を示している。

ヤンキーのトンネルスプレー落書きの比ではない。ヤンキーさんたちもここまでは頑張らないし、暇ではないと思う。

その他にもいろいろな理由はあるが、すでにこれだけでこの旧校舎は言い知れぬ不気味さを醸し出しているのだ。

先日、エルや燐を誘おうと声をかけた時も

「絶対にいきません！ だってあそこにはドラゴ……何でもありません。とにかく絶対に近寄らないでくださいっ！」と強く注意される始末。

「馬鹿いつてんじゃねえよ。それに旧校舎は封い……何でもねえ。お前絶対に行くなよ、絶対だぞ！」と何だか、行け！ と言われているような気がしなくてもない燐の談。

しかし、どちらも必死そうな顔ではあった。

前から思っていたことだが 　どうも二人はビビりさんらしい。大木さんほどではないが。

ともかく旧校舎は 　誰も近寄らない場所なのだそうです。

校舎の中に入り、鼻歌交じりに廊下を闊歩<sup>かつぽ</sup>する。

扉を開けた時に「パキイイン」と何かが割れるような音がしたのだが、僕は気にせず歩を進めている。だって壊れたものを気にしても仕方ないし。

建物の造り的には現在の校舎と変わらないので、非常に便利でいて、楽である。

灯りがついてないので少し薄暗いのだが 　勝手知ったる人の家。何度も足を運んでいる僕にしてみれば迷ったりすることもないのだ。

「 確か、ここだよね？」

数えて五分も歩いてはいないが、僕は歩を止めた。

目の前には埃まみれではあるが、「校長室」と書かれたプレートのかかった部屋がある。他の教室などと比べても、あからさまにここだけ偉そうな空気が漂っている。

この不景気の波を無視した部屋の前で、僕は「彼女」を呼んだ。

「ウーローちゃん！ あーそーぼー！」

「 やかましいわっ。というか、その呼び名はよすのじゃ！」

とりあえず待っていると、二秒もしないうちに勢いよくドアが開いた。

校長室の中から出てきたのは、一人の少女。

奪うように目を惹く炎色の髪は威厳の漂う華麗さを誇張し、髪よりさらに深い赤色の瞳は彼女の美しさをさらに際立たせている。確かにそれだけ見ると、圧倒されそうな感じなのだが。

「やあ、ウロちゃん。三日ぶりだね。どう、元気にしてた？」

「そういうお主は相も変わらずといったところじゃのう……」

室内に入って僕が軽く挨拶をすると、疲れたような顔をしてがっくりと肩を落とすウロちゃん。

「うーん、挨拶が聞こえなかったのかな？」

「本日はお日柄もよく　ウロちゃんも相変わらずロリロリな体型だね？」

「失礼なやつじゃな！　というか、前置き意味ないなっ！」

「拝啓、ウロちゃん　今日も素晴らしい幼女属性だね？」

「お、お主本気で容赦ないな！」

訴える幼女　ウロちゃんはびっくりしたように叫んだ。

しかし、彼女の体型はとにかく小さい。身長があまり高くない僕と並んでも、頭の高さが肩ぐらいまでしかないのだ。はつきりと言ってしまうえば、幼児体型。局所的な流行である、「萌え」の対象だ。

「ええい、いい加減にせいっ。とにかく！　妾の名は　」

「確か、ウールポロシャツだよね？」

「ぜんぜん違うわ！ ウロボロスじゃ、ウロボロス！！ 誰がポロシャツじゃ！」

「惜しい」

「惜しくないわああああ！」

そうかなあ、僕は惜しいと思うんだけどな。だってウロボロスと、ウールポロシャツ あ、夏によく着るよね、ポロシャツ。

名前を間違えられたことに憤るウロちゃんは、目を細めて睨んでくる。

「まったく、何故じゃ？ 何故、お主のようなやつが『竜王』の能力を持つておるのじゃ……」

「え、今日はドロクエするの？」

聞き覚えのある単語に反応して僕が問うと、ウロちゃんは「はあああ」と大きなため息をついた。

え、だって「リュウオウ」でしょ？ あいつは配合とか大変だよ  
ね。

ドロクエについて考えていると、ウロちゃんは渋々といった様子で話しかけてきた。

「……それで今日はどうしたのじゃ？ お主はいつもこんな時間には来んじやろつが」

ウロちゃんが言うとおり、普段はこんな時間にここを訪れたりしない。遊びに来るのは大抵、放課後の 学校が終わってからだ。

「ああ、うん。実はさ、僕のクラスに女王さ……サっばい転校生が来てて、教室が騒がしくってさあ」

「ほほう、転校生とな？」

ウロちゃんは興味ありげに目を細めてくる。さすが、ギャルゲーマスターウロちゃんだ、『転校生』への反応がすごい。どうやらウロちゃんも知りたそうなので、僕は続けた。

「儂げな銀髪で、何といつても美少女で……」

「ほう、ほう。定番じゃのう」

「そして極めつけは 貧乳」

「お主、本気でひどいな！ デリカシーとか知らんのか!？」

普通に転校生のことを話したただけなのだが、ウロちゃんは目を見開くほどに驚いていた。

えー、僕としては褒め言葉のつもりなんだけど？

「で、まあその女の子がまたすごくてさ？ おすわりと称して、クラスメイトの半数くらいを土下座させてたんだよ」

「何、土下座じゃと……？ それは皆を屈伏させていたということかの？」

「うん、まあ。皆、必死そうに頭すりつけてたし」

あごに手を当て訝しむウロちゃんの問いに、僕は首を縦に相槌を打った。

そんな僕を見てか、ウロちゃんはさらに怪訝そうな顔をした。

「……まさか、かのう」

「え、どうかしたの？ 体調とか悪いとか」

「あ、ああいや、何でもないので。気にするでない」

「それならいいけど。まあ僕の見解を言えば、クラスメイトたちはMマだね、間違いないよ」

「いやなクラスじゃな!」

険しい雰囲気吹き飛んだ。

その後も旧校長室でお昼を取りながら、ウロちゃんといろいろ会話をした。

プレイしたゲームはもちろん、ドロクエ。だが時間が足りず、結局、リユウオウは作れなかった……

再び転校生の話題が出たときに、ウロちゃんはまた眉間にしわを寄せ、険しい顔になっていたのが気になったけど……「ねえ、ウロちゃんって、何歳なの?」「ふんっ、二千は軽く超えておるわ」「ふうん、年季の入った合法ロリなんだね」「お主、すごいな!」……などとやりとりを交わしているうちにいつの間にか消えていたので

幼女チヨロイな、と思った。

「どこへ行ってたんですか、涼くん?」

ウロちゃんのところから教室に戻った僕を待ち構えていたのはエルだった。

さっきまで不機嫌そうだったのに今は向こうから話しかけてくる。

「ウロちゃんのところだけど?」

「ウロちゃん……? 誰ですか、その人」

やっぱりというか、ご機嫌斜めは継続中のような。

でもあんざることなかれ。僕はエルが不貞腐れている理由に察し

が付いているのだ！

「エル、気づいてあげられなくて……ごめん」

「なっ、急にどうしたんですか？」

真剣に頭を下げる僕に、エルは狼狽している。

だから無理はしなくていいんだよ。僕は……わかっているから。

「今日は……女の子の日だったんでしょ？」

「ち、違いますよっ」

「ま、まさかつ、妊し」

「ぜ、ぜんぜん違いますっ!!！」

火がついたように顔を真っ赤にしてエルは全力で否定してきた。

あれ、違ったの？

「じゃあ、どうして機嫌が悪いのさ。説明してくれないとわからないよ？」

「そ、それは……その……」

さらに顔の火を炎上させ俯くエル。

どうしたのかとエルの顔を覗きこもうとすると 不意に後ろから声がかかった。

「涼」

声の主は、リアだった。

「どうしたの？ おっぱいが大きくなるコツをエルに聞きに来たのか？」

「……………違っ」

やけにその沈黙が長かった。そんなに気にしてるのか。貧乳は貧乳で需要があるのに……もったいないなあ。リアは一度エルのほうを見てから、僕に言った。

「話が、あるの」

「ここじゃ、駄目なのかな？」

「……………」

反復させた僕の問いに口を閉ざすリア。だんまりを決め込んでいるということは、ここでは言えないこと、ってことか。

「うん、わかったよ。じゃあ、今日僕の部屋に来てよ。隣だしね」

「わかった。それでいい」

「ちょ、ちょっと待ってください!!」

先ほどまで意気消沈していたエルは、必死そうな形相に変わって話に割り込んできた。

「と、隣って、どういうことですか!？」

「ああ、そっいえばエルにはまだ言っただけで、リアは源荘の六号室に住んでいるんだよ」

「ええっ、涼くんと同じアパートにですか!？」

驚愕を露わにしたエルは、勢いよくリアのほうを向いた。

そして その激しい動きにBIGメロンサイズのおっぱいが左右に揺さぶられる!

「うん、ナイスおっぱい！」

「もうっ、意味がわかりません！」

天に届くだろうか若き乙女の叫び声を最後に、タイミングよく予鈴が鳴り 昼休みは終わったのだった。

## 5 タイムセールと関西人

ドロー！ カッ、と目を見開き 僕は高らかに宣言した！

「魔法カード発動っ、」右手にエルを左手にリアを「！！ このカードの効果により クラスメイトはM奴隷と化す！」

「ちょ、チート過ぎるうえに理不尽だろ！」

「し、しまった！ 僕としたことが…… クラスメイトたちはもともとMだったの忘れてた。くそう、ケアレスマスとは！！」

「その解釈は納得いかねえよ！？」

うーむ、やたらと級友たちからの批判が多いな。

やっぱり、原作クラッシュに怒りを浸透させているのだろうか、と僕はクラスメイトたちの反応に思わず後ずさってしまふ。

どうでもいいけど、マニア多いな、このクラス……

だがしかし、本当の問題は一向に解決していない。

「じゃあ、どうしたらそこ通してくれるのさ？」

教室の出入り口である二つの戸の前から動こうとしないクラスメイトたちの様子に、僕は口をとがらせる。

現在、放課後の下校時刻を回ったところ。

窓越しに眼下の校庭を見ると、すでに帰路へとつき始めている生徒もちらほらと見え始めている。

当然のごとく、僕も学校から帰るため、教室を出ようとしたのだが なぜかクラスメイトたちがカバディの体勢で止めてきたのだ。思わぬところでの挑戦だったが、僕も負けじと カバディ、カバディ、カバディ。

「おい……何やってるんだよ、涼」

「当然、カバディだけど？」

「だから何でだよ!？」

いやだなあ、勝負を持ちかけてきたのはそつちからじゃないか。スポーツマンシップを否定的な相手の態度に僕は首をかしげる。えっ、カバディじゃないの？

「いや、カバディとかそういうことじゃなくてな？ お前は どうして、リアさまと一緒に帰ろうとしているんだ、って聞いているんだよ どうなんだ、涼？」

皆を代表してのことか、全身を包帯で包んだ男が聞いてきた。

「ええと、君、誰？」

「燐だよ、紅蓮燐！ 普通、声とかでわかるだろうが!？」

「Ah………What's a Name？」

「日本語だよっ、俺、日本語でしゃべってるよ!！」

情緒不安定な包帯の男はあろうことか、僕の悪友である紅蓮燐を称してきた。

貴様……ふざけたことを!!

「そんな冗談は止めてよ。紅蓮燐は………死んだんだから」

「生きてるよっ、ぴんぴんしてるよ! お、お前らも何残念そうにしてんだよ、ひどすぎんだろ!？」

男は慌てて顔の部分の包帯を外し、自らが燐だということアピールしている。

出てきた顔が燐だということを確認してクラスメイトたちは、大

げさなほどにまで肩をすくめ、大げさなまでに深くため息をついている。中には、チツと舌打ちをかましている人もいた。

薄々気づいてはいたけど、皆は燐のことが嫌いらしい。

直訳すると、ウィ、アー、ノット、ラブ、ア、リン。字余り。

「それくらいにしておこうよ、皆。燐だって、僕たちの仲間だろ？」

「お前のせいだよ！ お前のせいで俺への不信感が積もりに積もってるんだよ！」

「皆、こいつは燐じゃない！ 燐は自分のエゴを人に押し付けるほど無責任なやつじゃないよ！」

「おまつ、やめろよ！？ 本気で信用がなくなるだろうが！」

「それは気にしなくても大丈夫だよ。すでに誰も信用してないから」「お前ホントに容赦ないな！」

はぶられている事実を耳にした燐は、心の汗とともに叫んだ。

燐を信用してる？ はっ、笑い話にもならないよ。

「 どうでもいいですけど、涼くん。早くしないとスーパーのタイムセール始まってしまいますよ？」

「あ、そうだね。あそこのスーパーは急がないと売り切れちゃうから」

たしなめるように、僕の右側に立つエルが下校を促すよう言った。そう、今日は最重要日用品である『卵』のタイムセールが四時半よりあるのだ。数限りある生活費を削らない（主にゲームの）ために、僕は何としても今日の特売でTAMAGOをゲットしなくてはいけない。

なのでこんなところで足止めを食うわけにはいかないのだ。

「ごめん燐、僕急いでるんだ。皆も今度また、かまっであげるから」

『子供扱いすんじゃないよ！』

謝罪したはずの級友たちから最近の若者に多い、「一端に大人気取り発言」が返ってきた。現在はいい歳して親に怒られた時の二トが使うことが多いことで有名である。

はあ……クラスメイト、めんどくさいな。

「ねえ、君の口からも何とか言ってみてよ　リア」  
『！……！』

隣たちは「リアさまがどうのこうの」と言っていたので、当の本人にふつてみたのだが……何で、皆顔色悪くしてるのかな？

少し持て余し気味な僕の呼びかけに、リアは即座にうなづいてくれた。

「……お前たち」

『は、はいつ、リアさまっ！』

口を開いたリアの声にクラスメイトたちは瞬時に姿勢をただした。僕としてはカバディのままでもよかったのに。

お構いなくとばかりにリアは続ける。

「私、涼と一緒に帰るから」

「しかし、べ……リアさま。それでは魔王さまに申し訳が」

何かを言いかけた隣の言葉をさえぎるように、リアは右手を前へとつき出した。

あれ？　リアの右手が青白く光ってるような……

「二度目は、言わない」

『じ、じご無礼をいたしましたあー!!』

掲げられた右手を凝視して皆は見事というべきほどに土下座した。ひれ伏したのを確認してリアは、右手を下ろした。

「ただ、その手はやっぱり光っていなかった。」

でもこの集団土下座、どこかで見たことあるような……あっ!？  
「こ、これはまさか!！」

「皆の者、控えよ、控えよ!　ここにおわす御方をどなたと心得るか!」

『……………』

そして、ここで印籠を懐から

「あつ、急がないとタイムセールに間に合わなくなるよ。早く行かなくちゃ」

『やめんのかよ!　やるなら最後までやれよ!!』

どうやらクラスメイトたちは最後までやって欲しかったらしい。

水戸黄門、流行ってるのかな?

とりあえず、本当にめんどくさいクラスメイトたちだと思いましたが。

荒れ果てた戦場。熾烈な猛獣たちとの死闘の末、僕らは宝具『TAMAGO』を手に入れた

まあ、比喩はこれくらいにして……つまるところ、スーパーにて

卵を買うことができたのだ。しかも、何と三パックも！

「いやあ、エルモリアもホントありがとね。卵はお一人様一パック限りだから助かったよ」

「いえ、それはいいんですけど……」

「べつにかまわない」

スーパーからの帰りの道で、僕は二人にお礼を言った。今回のタイムセール　二人なくして、この成果はなかった。

今月の生活費のことを思うと、感謝してもしきれないほどだ。

「いつもはおばちゃんたちの肉圧パワーに気おされてとれないんだけど、何か今日はスムーズにいったね」

通常ならば目の前に壁があるがごとく、おばちゃんたちの肉壁が僕の前に立ちふさがってくるのだが、今日はそれがモーセのなんとかのように真つ二つに割れていたのだ。まるでそこに僕たちを通す道ができたように。

「けどホントにラッキーだったね。一つ買えるだけでも儲けものだったのに、二つもなんて！　僕の機嫌もうなぎ昇りだよ」

「涼くんの機嫌はおいておくとして……でも、それっておかしくないですか？」

「えっ、何が？　普通にツイてただけだと思うけど」

「だって他のお客さんも、店員さんも明らかに「私たちに」土下座してましたし……やっぱり、おかしいですよ」

確かに一理ある。

そう　他のお客さんやら店員さんやらが皆、こちらを向いて土下座していたのだ。二つに割れた人垣はほとんどがそうだった。

でも僕は

「僕は、奈良県の人たちが決まった時間に、決まった方向に礼をするやつの発展版だと思っただけど？」

「涼くんの解釈は斬新過ぎますっ！」

やだなあ、革新的といってよ。いつも見てます、ケンミンSHA  
W!

ちなみに僕は、浄土宗なので礼はしません。

「そうじゃなくてっ……リアさんが転校して来てから、学校の皆もこんな感じじゃないですかっ言っているんです!!」

声のトーンが上がり、なおも憤慨したようすでエルは、リアのほうに目を向けた。

「無視しないでください、リアさん！ あなたのことを言っているんですよ!？」

「……………」

どういった理由で怒ってるのかは知らないが、エルはリアを鋭く睨みつけている。

うーむ、まるで雌雄を決する、みたいな感じだ……何かあったのかな、この二人？

睨まれたリアはそれに対抗するかのように目を細めて、

「あなたには、関係ない」

「なっ!？」

言い放ったリアはどうでも好さそうにそっぽを向き、エルはそれ

を見て絶句している。

おう、喧嘩か？ おいおい、お二人さん。クールに行こうぜ、クールに。

「二人とも熱くなりすぎだよ。何があったか知らないけど、ヒートビズは社会の常識だよ？」

「……………」

お前こそ何言っただよ、と言いたげに二人は僕に冷たい視線を向けた。

やれやれ、そんなことも知らないのかい？ 仕方ないなあ、僕が教えてしんぜよう！

「ゴホン……………いいかい、君たち？ 現在、地球は温室効果ガスによって地球温暖化が進み」

「……………」

そうそう、それでCO2が充満して

「あつ、早く帰らないと、五時から放送の『おじさんといっしょ』が見られないよ。録画してないし急がないと」

「だからやるなら最後までやってください！」「（こくり）」「

見事な鋭いデュアルツツコミ。

先ほどまでの険悪な雰囲気は嘘のように、二人は息の合ったコンビネーションを見せてくれた。そうそう、それでいいんだよ。

でも、デモンストレーションというか、僕への無茶ぶり多いな…………

「でもさ、二人と」

「やっと思っつけましたで、お姫さん。えらい探さしてもらたわ」

二人とも仲良くなったね、と言おうとしたところで突然、僕の言葉は遮られた。

電柱の上に立つ一人の少女によって。ええと、パンツ見えるよ？ というか、見えてます。黒いのが。

露出云々、そんなことお構いなしと言わんばかりに少女は、獲物を見つけた獣のようにリアを見据えている。

「これまではちょこまかと逃げてたようやけど、もう逃げられへんよ、姫さん？ チェックメイトや」

「……………」

何も答えずだんまりとするリアと、対照的に舌舐めずりまでしている黒髪の少女。オリーブの丘でエロスと叫びたい。あ、メロスか。

「ええと、このストリップ的なエロい人はリアの知り合い？」

「（ふるふる）」

絶対にこんなやつは違うと、何度もリアは首を横にふった。

そうか、知り合いじゃないのか……………なら

「ストーカー？」

「どうして両極端やねん！」

露出魔の少女はあろうことか初対面の僕にツッコミを入れてきた。

……………うーむ、しかしなんだろうか。このむずがゆい感じは。

「おーい、お兄さんどうしてん？ もしかしてこわがっとなるんか？」

「ああ、いや……………うん、その」

尾崎節で言うと、うまく言葉にできない。

何というか、こう、噛み合わせが悪いというか、食べ合わせでおなかがぎゅるぎゅるみたいなの

「はははっ、仕方ない仕方ない。普通、電柱の上にとっとする時点でそら、こわいわな？」

少女は笑いながらそう言う。……仕方ない？

そうかつ、わかった！ 眼鏡の小学生風に言うならば 謎はすべて解けた！

「エル！ リア！ この変な人の正体は えせ関西人だよ！」  
『……………』

瞬間、空気が固まった気がした。

しばらくして話の流れについていけないのか、二人はえせ関西人の少女のほうに冷めた視線を向けた。

「ち、違っわ！ うち生まれも育ちも関西や！ 何を根拠に」  
「ほらそこっ、本当に関西人なら「違っわ」じゃなくて「ちやうわ」だよー！」

ひどく慌てたように否定しているが、もう遅い。僕は違和感の正体に気づいてしまったのだ。

結論を言えば この子、関西弁なめとるで！

どっして 〓 なんで。

どっしたの 〓 どないしたん。

仕方ない 〓 しゃあない。

「なんで、どない、なんでやねんの五段活用を知らないなんて……  
関西人が聞いてあきれるよ！」  
「涼くん、それだと三段だけですよ……」

傍で聞いていたエルがぼそぼそとツッコミを入れてくる。そない  
やさけ東京もんは、と言ってやりたい気分だ。

「くっ、う、うるさいわ！ そんなんどうでも」

「そこ、「やかましいわ」でしょ！？ やり直し！」

「ひ、ひう。や、やかましいわ」

「声が小さい！」

「や、や、やかましいわっ！！！」

「それでよし。貴様はえせ関西人から、にせ関西人に昇格だ！ 喜  
べ！」

「涼くん、関西弁の教官みたいになってますよ……」

心底呆れた顔をして、しみじみとエルが咳く。

まったくその通りだ。即席師匠とはいえ、不出来な生徒を持つと  
苦勞するよ。

仮であつても少しだけ、誰にも彼にも差別しない関西のおばちゃ  
んを尊敬した。

## 6 死神に会いました

余談だけど、古今東西日本最強である関西のおばちゃんたちは、秘伝の七つある必殺技の一つ、「知らない人でも間合い潰し」通称、たてまえブレイカーを得意としているらしい。

「あの、すみません。道をおたずねしたいのですが」「あなた、うちいくつに見える?」「ええと……四十歳くらい、かな? それで道をたずね」「いややわ、もう!」「うち、今年で六十一やで?」「うれしいわ、もう!」「はは……それで道を」「もう、おばちゃん気分ええわ! たこ焼き連れてったるわ、たこ焼き!」「いや、あの」「近くにおいしいところあるさかい、そこ行こか!」「ほら、はよ!」「………はい」

おばちゃん、すごい。

「よ、いしょつ、と」

と声を上げながら、電柱を猿の木登り巻き戻しのように下りてくる少女。下を見ないようにと下りてくるところから察するに、相当のヘタレさんだということがわかる。

「つと、ふう」

トン、という音が鳴る。ようやく地に足をつけたようだ。

黒髪のポニーテールに相対的な白皙の肌。つぶらな黒曜石のような瞳が印象的な少女。彼女の名は ैसे関西人改め、にせ関西人。

「違う……ち、ちゃうわ！ 何勝手に作っとなねん！？ うちの名前前は」

「黙れ！ クソ虫な貴様の名など、にせ関西人で十分だ！」

「ひうっ！ け、けど、うちは」

「どうした、声が聞こえないぞ、返事はどうしたあ！」

「は、はいっ。さああ、い、いえっさああ！」

「……涼くん、もしかして教官をやるの気に入ったんですか？」

「気に入った」

満足そうに首を縦にふる。

そんな僕を見てエルは疲れたようにため息をついていた。そのさまはまるで、出来の悪い子を見る母のようだ。

えー、だってこの子すぐくおもしろい反応するし、僕も教官やってて楽しい。

今なら、スパルタで有名なヒトラーさんの気持ちができるかもしれない。

終始教官ごっこに興じる僕に、びくびくとしながら少女は

「もう何やねん、あの兄ちゃん……心底、ようわからんけど、めっちゃ怖い……」

ぶるぶると震えながらに僕を見ながら呟いた。聞こえてるよ。失礼な、僕ほど人畜無害なやつはいないよ。

あっ、そういえば。

「ええと君、名前なんだっけ？」

「兄ちゃんがそれ言うんかいな！」「涼くんが言っんですか！？」

「（じくじく）」

おお！？

予想外の三人からのツツコミは、僕への集中砲火となった。  
名前を聞いただけなのに、なぜだ……

衝撃の出来事に驚いている僕の反応をみて、三人は大げさにため息をついていた。

「はあ……うちの名前は、グリム・リッパーや。よろしゅうな」

仕方なくとか、渋々といった様子で少女は名乗ってきた。

「うん、わかったよ。君は　グリム・にせ関西人・リッパーさんだね？」

めが、かつこいいい。

「ちょ、ちょっと待ちいや！　何か間にいらんもんはいつとるで！？」

「ええ？　でもこっちのほうがよくないかなあ、キザカツコヨス」

「どこがやつ、時代錯誤関係なしにダサすぎるやろ！？　どんなセンスしとんねん！」

どうやらグリムさんと名乗った少女は、この名前は納得がいかないようだ。えー、最近はミドルネームとかあったほうが何かと便利でいいよね？

笹木・D・涼とかだったら、海賊王になれそうな気がするし。

「ああ、もう！　この兄ちゃんと話してたら、全然先に進まれへん！　まるで底なし沼や！」

「言い得て妙だと私も思います……」

む、エルまで裏切るとは。僕の背中は責様には預けられんな。

僕への罵倒を言い切った後、なおも憤慨した様子でグリムさんは、

「とにかく　うちの用があんのは、あんたや、姫さん！」

びしっとこちらに指を向けた。

貴様、人に指を向けるのは失礼な行為と知っての狼藉か！　君のお母さんに言うよ！？

「……………」

「ほう、シカトかいな。自分から名乗るつもりはないようやな……なら、うちが言うたるわ」

ニヒルな笑みを浮かべグリムさんは、大げさというほどに前ふりをした。こ、このまますべったらどうするつもりだろう！？

場を埋め尽くす緊張感。

プラス、僕の期待と心配。芸人の親の気持ちに痛いほどに分かる。

「ならず者ぞろい、群雄割拠の魔界を統べる王、魔王が一子」

ポエムのようにグリムさんは続ける。

「魔王の数多くいる子の中で、王位継承序列一位。今や、次代の王にいちばん近いとされる」

「ごくり、と僕は唾を飲み込んだ。

「　魔王の、そして魔界の姫。あんたのことや、ベリアル！」

グリムさんはびしっ、とまたこちらを鋭く指す。

ベリアル……か。

なるほど、話はわかった。つまりは

「つまりは……僕のことだね」

「なんでや!？」

拉致外の発言にグリムさんはこれでもかとはかりにツッコミを入れた。

えー、そんなこともわからないの？

「だって、ベリアル「リ」は、笹木涼「リ」だよ？ 常識じゃないか」

「だから、どうしたいいうねんっ！ 全然意味わからんわ!」

「いや、だからね？ 「リ」が一文字かぶってるから」

「言ってることがわからんいう意味違うわ！ そんならどうでもええて言うとなねん!」

「ぜえ、ぜえ、と息をきらし、一人ツッコミ運動会を終えたグリムさんはこちらをにらんでくる。

もしかして僕、また何か悪いことしたかな？

「もうええわ、兄ちゃんに付きおうてたら、日が暮れてまっ……」

目に見えてげんなりとしたグリムさんは一人、小さく呟く。

そしてもう一度、意を決したように、こちらを向いた。

「わかつとると思うけど……銀髪のアンタヤ！ ベリアルさん、単刀直入に言うわ。あんたの命、うちがもらいうけるで!」

「つまり、僕の」

「せやから兄ちゃんとちゃう言つとるやろっ！ どこが銀髪やねんっ、真っ黒やないか!」

怒られた。

どうやら、またしても御呼ばれは僕ではないらしい。おかしいな……ベリアルの「リ」は、笹木涼の「リ」なのに。ペリーの「リ」も、僕の「リ」なのに。

名残惜しい心のままに、左隣に控える彼女へと視線を移す。

確かグリムさんは、「銀髪の」って言ってたから……

「何か、君のことだ、って言ってるけど？　リア。そのころどうなのさ？」

僕たち三人の中に銀色の髪は彼女しかいない。

しばらく口を閉ざしていたリアは少しの沈黙の後、重々しく口を開いた。

「……私がベリアル」

「いいや！　僕がベリアルだつ、絶対譲らないよ！」

「兄ちゃんは黙つといて！」「涼くんはしゃべらないでください！」

本命のグリムさんだけでなく、味方のはずのエルからも怒鳴られた。とてもこわい。

どれくらいこわいかというと、東北にお住まいのなまはげさんぐらいこわい。大阪府にお住まいのたむけんさんの獅子舞はこわくない。

「ああ、もう！　これから兄ちゃんは無視するっ！　付き合ったらへんわ！」

「きわめて賢明な判断です」

憤るグリムさんの声にエルは同類を見るような目を向けて、うん

うんとうなづいていた。

え……そんなに僕、邪魔かな……？ 千年祭の後、都を追われる  
せんとくんの気持ちがあった。

「よっしゃ、いくで！」

「いつてらっしゃい、あなた」

……

ウソだろ…… ホントに無視されたっ！？

「出でよ！ サテユルヌス 死神鎌！」

すると、グリムさんの叫ぶ声とともに地面から一本の大鎌が出現  
した。

黒く、どこまでも黒い色をしたその鎌。柄のほうからのびる長い  
鎖、ニメートルはあるだろうか。

でも見た目はかっこいいけど、なぜかひしひしといやな感じが伝  
わってくる。すぐにでもこの場から離れたいと思いたくなるような  
……

「そんな、まさか…… 死神っ」

そう呟いたエルは、目を見開くほどに驚いていた。

え？ シニガミって、何？ 下敷きなら持つてるけど。

「姫さん、うちはあんたに恨みはあらへんけど」

そう言いながらグリムさんは、身の丈より大きい鎌をぶんぶんと  
振り回す。そして

「ほんまにすまん。こつちも仕事やさかい、堪忍してやっ！」

地面を蹴って、こちらに飛んできた。

僕の脳裏に浮かぶのは、昨日見たアクション映画のワンシーン。  
うーむ、これは……

「ねえ、エル。これ、写メ撮ったほうがいいかな？ マトリック

」  
「いいから避けてください！」

怒鳴るようにエルは普段ありえないぐらいの大声でそう叫ぶと、  
懐に僕を抱え、跳躍した。

直後、僕らが先ほどまでいた場所は、つんざくような破壊音とともに、大きなクレーターと化していた。

## 7 鱧とキスは別物

ドゴオオオオオンっ！

小規模竜巻のような風圧に乗り、辺り一帯に立ち込める砂煙が視界から自由を奪っていく。

前後左右さえ見ることのできないこの状況で唯一あるのは、聞こえるのは 音だけ。

そう、声だけだった。

「はははっ、どうしてん姫さん？ 何の抵抗もなしやとさすがにうちも良心の呵責が許されへんのやけど」

「……………」

「ハッ、まだ無視すんのかいな。この期に及んで、まだ頑固とは。言っとくけどな、いくら姫さんとはいえ、この鎌で傷をおったら死んでまうんやで？ まあ、そないなことうちが言うことやないんやけどな」

「……………」

「はあ、ならあの姉ちゃんか？ 違う。うちが思うに、そうやな…あの兄ちゃんを殺せば、うちのこと憎いとか思ってくれるんか？

ほしたら先に兄ちゃんを

「涼には、手を出すな！」

「やっつというか、何や姫さん、大声も出せんのかいな。あんたは典型的な無口やと思っつたわ。でも この場でそれは命取りやで？」

「……………」

ザツと地面を蹴るような音がした後、大きく風を凧ぐ音がした。ブオン、と何かを鋭く振りきったような音。

「我ながらに卑怯やとは思つとる。でもな、お互いに視界の悪い場所で大声なんか出したら、場所なんか丸わかりやんか。あんた、そんなこともわからんかったんか？」

たやすく詰るなじようなグリムさんの声が聞こえた。

嘲笑うような、あるいは侮蔑しているような含みを感じさせるその声が。

さっきまでは確かにあったリアの声は……聞こえなくなった。

むにゆう、とした感触が僕の身体にあたっている。すごい、やあらかい。

人類の至福を感じさせるそれは僕の本能を、青春の熱いリビドーを刺激している。

そう、これは 男として語らずにはいられない！

「おっぱい 女性の胸の総称。A、B、C……大きさは形は確かに違う。だがそれは人類、いや、全生物における英知の結晶。やわらかく、それでいて温かささえ感じさせるそれは、まさに……神秘の玉手箱やあ！」

「ちよ、少しは自重してください！」

ぎよつと形相を変えたエルは、男の性を語る僕を抱えながらにそう叫んだ。エル……彦 呂さんはすでに自重しているよ。そう、どこまでも続く果てしない空のように広い芸能界で

「……………うん？」

過去経験したことのない浮遊感に駆られ、怪訝に思った僕は僕はふと下のほうに目を向ける。

今、僕の両足は地面についてないし、砂埃で見えにくくはあるが、さっきまであった辺りの風景が全部下に見えている。

今、気づいた。

現在僕は 空に浮いている。というか、

「飛んでるよっ！」

「今さらですけどね……」

「はははっ、飛べない豚はただの豚！ 飛べるエルはただのエル！」

「何でしょうね……こう、ものすごく失礼なことを言われている気がするんですが！？」

初めての体験に興奮気味の僕の声に、エルは相変わらずの区々（まちまち）なテンションである。

え、何でそんなにテンション低いの？ 飛んでるんだよ？ ライト兄弟もびっくりだよ？

イエスに代わって、僕はジーザスと叫びたい。

「金髪の姉ちゃん……あんた、人間とちゃうかったんやな。まあ何となく感じてはおったけど」

依然とたちこめる砂煙。

飛行中の僕らの真下にできた大きなクレーターの中で、眉間にしわが寄ったままのグリムさんが口尻を上げて、呟く。

しかし、グリムさんの倦怠そうに向けられた表情にも、エルは無然とした表情で、

「そういうあなたもですよ？」

死神さん」と皮肉そうに口を

歪めた。

笑いながら、そして黒いオーラを撒き散らしながら会話を交わす二人。

うーん、何やら楽しそうだ。うらやましい。

「ねえ、ねえ。僕も混ぜて？」

「涼くんは静かにしててください」「兄ちゃんは黙っといってくるか？」

仲間にしてほしそうな目をする僕のほうを見向きもせず、二人は真剣な表情で睨みあっていた。

笹木涼 を 仲間にしますか？ はい/いいえ

エル と グリム は いいえ を 選択

笹木涼 は 悲しそう な 顔 を した……

いじめ、かつこわるい。

「その白い翼……天使か。それも八枚羽の天使長。姫さん追っかけてただけやのに、こら、えらい大物が釣れたわ」

「御冗談を、あなたもそうなのでしよう？ 大鎌を持っているのは、死神長ということだったはずですから」

腹を探り合うための交わされる二つの言葉。

お互いを値踏みするかのよくにぶつかり合う二つのまなざし。

両者ともにわずかにも隙を見せない、そんな確固たる意志が表情に垣間見えていた。

「ああ、その通りや。一応、姫さんは魔王の姫ってことでVIPやったし、形式的にうちが出てきたわけやけど……まあ、そないな気遣いも必要なかったけどな」

そう言つと、エルに見せつけるように自分のもつ大鎌に付いた液体をビュっ、とふり払つた。

「その、リアさんは……どうしたんですか？」

言葉に詰まりながらもエルが問う。心なしかその声が震えていた。

「感触に手ごたえはあつたしな。それに、この鎌に切られたら魂ごとばらばらになるし……な」

「……そうですか」

悪びれる様子など微塵もなくグリムさんがそう答えると、エルはそつと目を伏せた。

「それでや」

会話に仕切りを入れるような声。

声の主であるグリムさんは再び鋭い目でエルをにらむ。

「どないするか、天使長？ あんたらからしたら、魔族の姫さんはどうでもええんやろうけど、うちは死神や。あんたらの忌み嫌う存在、や。……何ならここで戦つてもええけど」

ジャリ、と長い鎖を鳴らし、大鎌をかまえた。

別にやるならやつてもいい、とまるで誘っているかのよう。

好戦的な態度をとるグリムさんのそんな様子に、エルは左右に首を振った。

「いいえ、遠慮させていただきます。私としては本意ではありませんが……一般人の涼くんを巻き込むわけにはいきませんし。あなたもおわかりのはずですよね？」

と、エルは僕を見る。

女神のような慈愛に満ちた、そんな顔で。

普段の僕ならここで「おっぱいで顔が見えない」とか言うはずなんだけど……なぜか、言葉に詰まってしまった。

エルの。その わが子を守る母のような、そんな顔をされたら。

「……まあ、そっちがええんやつたら、うちはええけど」

キョトンとした表情を見せるグリムさん。

数秒の沈黙の後、何か腑に落ちない様子で大鎌を退いた。

「ほんまにええの？」

「何度も聞かないでください、私の気が変わらないとも限りませんから」

わかりきった答えの二度聞きを、エルは機嫌悪そうに返す。

それを聞いてグリムさんは、ほっ、と一息つく。そして踵を返す。

「そしたら仕事は済んだし ほな、遠慮せんとうちは帰らしてもらうわ。兄ちゃんも悪かったな。もう会わんと思っけど達者でな」

グリムさんは最後に僕のほうを向いて、地面を蹴り、飛び去っていった。

その後、少しの間があく。

二人だけが残ったその場には何か言いづらい、ばつが悪い、そんな空気が漂っている。

わけのわからないことだらけの状況から、ようやく落ち着いた僕はエルに話しかけた。

「……ねえ、エル」

「何ですか、そんな藪から棒に？」

「さつきから思ってたんだけど……背中から羽、生えてるよ？」

「ホント今さらですよ、それっ!？」

シリアスな空気が吹き飛んだ。

宇宙でもないのに浮遊体験をしていた僕は、エルとともに再び地面に足をつけた。帰ってきたよ、地球よ。

「さあ、エル！ 洗いざらい白状してもらおうか！」

「いきなりですね……それにすごいテンションですね」

ぼそぼそと何か言っているが、僕にはそんなことどうでもいい！ ジャケットのいちばん上のボタンくらいにどうでもいい！

「エルは僕に言わなきゃいけないことがあるはずだよね!？」

「それは……」

追及に口ごもるエル。  
なおも必死に僕は彼女に訴える。

「たった二人だけの幼馴染でしょ!?!? こういう隠し事はなしでいこうよ!」

「……………」

そう、僕たちは幼馴染。  
いつも、何でも一緒だった。

だからこそ、こういうことはちゃんとしたけじめをつけて、キチンとしておきたい!

「タイムセールで買った僕の卵、どこやったの!?!」

「ええっ!?!? そっちですか!?!?」

思わず仰け反るくらいにエルは思いつきりに驚いていた。

そっちって、なんだよ! 僕にとってはそっちがこっちなんだよ!  
! のっち、どこいったんだよ!

「はあ………… わかってはいましたけど、涼くんは本当にすごいですね」

一周回って、呆れたような顔でエルが呟いた。

ふん、今さらほめたって僕は騙されないぞ、このヤロ。ほめて、もっとほめて。

「僕はほめられてのびる人だよ?」

「自分で言う人初めてみましたっ!」

やだなあ、偉大な先達たちがいるじゃないか。決して口にはできないのだけれど。

「涼くんは本当に……というか、さっきのこととかはスルーなんですか？」

「さっきのことって？」

ツバメ返しではなく、オウム返しがごとく、僕は問い返す。返答に詰まったのか、苦い顔をしてエルは眉をひそめる。

「ほら、死が……グリムさんのこととか、その……私のこととか

必死にというか、えらく継ぎ接ぎにはあるが、エルは呟いた。うーむ、そのことか。

さっきの地面が吹き飛んだりとか、空飛んだりとか、羽が生えていたりとかのやつ。

「うん、大丈夫。それはもうわかってるから」

「え、そうなんですか？」

キョトンとするエルの問いに、僕は当たり前前のようにうなづいた。なんだそんなことか、と。

僕は何気なく

「中二病だよね？」

「あれだけのことがあってそれが言える人も初めてみましたっ!!」

驚愕の色に顔を染めるエルは一息で叫んだ。すごい早口です。

「そんなことより、卵だよ。せっかくタイムセールで買ったのに。ここでなくなったら意味ないよ」

「そんなこと……ですか……？」

「うん、そんなことだよ。所詮はね？」

張り裂けてしまった場の雰囲気エルは肩を落とし、大きくため息をついていた。

えー、卵、大事だよな？ ポケ ンとかでも。

生存本能の赴くままに、僕はきよろきよろとTAMAGOを探す。排水溝、ない。電柱の裏、ない。畑の中、あっ！ ミユ のタマゴ！ でもいらない。

「ないなあ……卵……どこいったんだろ」

悩ましげに僕はおもわず、ため息をついてしまう。

一度、どこでなくしたんだろうか、と振り返ってみる。

スーパーを出た 三人で帰っていた えせ関西人が現れ

た 飛んだ ……なくした

うーん、問題は出るとき誰が卵を持っていたか、だけど。……そ

うだ！ 確か

その時。不意に後ろから声がした。

「……涼」

透き通るような銀色の髪に、少しの濁りもない純白の肌色を持つ少女。

そこにいたのは リアだった。

夕日を背に立ちすくんでいる彼女のその手には、タイムセールでゲットした卵パックの入った袋をしっかりと握っている。

生き別れの妹に会う兄のごとく、僕は急いで駆け寄った。

「リア！ 卵！ どこいったのさっ、心配したんだよ!？」

「それ、卵も一人に入ってますよね……」

僕の後ろを追ってきたエルがさりげなくツッコんでくる。  
そんなことはいいんだ。今は卵とリアのの生還を喜ぼう！  
いや  
あ、ほんとによかった。

「いやあ、リア。卵持ってきてくれたんだね。ホントにありが

「涼

「え？」

名前を呼ばれ僕は顔を上げて、リアのほうを見た。瞬間。

口を ふさがれた。

あたたかくて、やわらかい。

優しくほのかに香るシトラスのにおいととも……彼女の唇によ  
って。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7944z/>

---

潜在能力は有効に使いましょう（改）

2012年1月2日10時47分発行